

これは世につたえておきたい  
かたっておきたい  
わが胸の底から真実のおもい  
人生幾山河のめぐりあい  
あの日の風やひかり そして空のひとひら  
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路  
「自分史図書館」は その証言館です。

### 新刊紹介

○『黄櫨』33号刊行



2008年12月13日刊行で人生史サークル会誌『黄櫨』は歩みつづけて、33号のバックナンバーを数える。平成9年のスタートから12年の歳月。創刊に当り、激励の言葉を寄せていただいた郷土八女出身の作家小島直記先生は去秋ご逝去。行年89歳。哀悼

の意を表しながら、改めて流れゆく年月のなかに人生を顧りみる。

34号には、80歳、傘寿を越え、ペンをとり「人生」を刻みつけられている会員を讃える特集を構想している。

ところで刊行毎に各方面へ進呈もしているが博多文化人会誌『紫水』編集の秋山喜文さんの便り。「内容一もり沢山。P91福原さんP94石橋さん、一寸開いた頁だけでもつい引きずりこまれて読む程です。とくに石橋さんの『星野ジャパン批判、野村監督期待の話など、「客観的な判断」で納得できることばばかりでした』と好評。

### 新刊紹介

○文章歩道 冬号



刊行のたびに、「自分史図書館」に寄贈いただいている随筆誌、この号には九州出身の詩人高木護さんが特別寄稿「殺さないで、ことばたちが呻く」と題し、死語にされていることばについて卓見を述べている。

例えば「日雇い土方」について――

土方をドカチンというのは蔑みのことばであったが、「土方しかできなかったから、気にもならなかった。ドカチンといわれるたびに相手にニコニコ顔してあげながら、一ぱい引っかけは、

ドカチン ドカチン 三日もやれば一人前

おいらは きょうもドカチン

あしたもドカチン 天下のドカチン

大きな声でうたったものだ。」このことばを死語や差別語にしたのは誰かと高木詩人は問いかけている。高木さんは矢部村日向神ダム工事で土方体験を持っている。かれの著書から論文を書きたいといって私のところへやってきた大学生もいた。（椎窓 猛）

### 受贈図書紹介 36

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。  
あしからずご了承下さい。

美しい里……………田中 裕子  
秋日和……………杉 真里子  
見えない潮……………坪井 勝男  
ビーキアハウ……………脇川 郁也

午後の大回廊……………渡辺 斉  
抽斗にピストル……………麻田 春太  
北一輝の帽子……………石川 敬大  
九月、沛然として驟雨……………石川 敬大  
歌集寒牡丹……………永松 典子  
夢ならば……………中嶋輝洋子



○句集 鴉日和  
井上 淑子

夕虹の音符を仰ぎ口ずさむ  
廃線の駅舎に灯る初蛩  
芳崖の絵を桐箱に秋惜しむ  
立冬の陽に招かれしアドバルーン  
水琴屈に父祖の声する初手水  
春雪や父の軍靴捨てきれず  
春昼や「帰居」の馬の絵ふりむけり

久留米在住・「自鳴鐘」同人



○帽子をかぶった  
とうもろこし  
伊藤 典子  
(高遠書房刊)

館長宛に便りがしたためられていた。「八女市の田中辰雄さんが本代と送料をお支払いくださって、高遠書房から謹呈する次第です。父と娘の心温まるやりとりが描かれており、読後感さわやか、の評も頂戴しております。書架に置いていただければ幸いです。」  
標題となった「帽子をかぶった」というのは、父の道楽は、家庭菜園。信州飯田の里に近頃、菜園荒しにタヌキが襲来する。その防止策に、とうもろこしに紙袋をかけることを父は思いつく。それが帽子をかぶったように見えるというのだ。クマ狩りの話もあるが、猟師の減少、高齢化が問題との話。気どりに書かれたエッセイ集で、心なごむ思いで読まされる好著。



○一枝一葉一花の集い  
桑野 慶子

—図書館に行ったある日のこと、「石の墓をつくるよりも、紙の墓をつくりたい。多くの人々に支えられながら生きてきた、本当の自分を書くことは、自分を残すことだ。」という一節を読んで、また気を取り直して書き続けた。—と序に書かれている。退職後とはいえ、諸団体の役員、暇に野菜づくり、書くのは食後、いっこうにピッチがあがらない。記憶力も減退してゆくが、なかなか重量感のある典型的な自分史である。大正2年生まれの昭和女性一代記である。

コラムニスト富沢義敬さんより

「黄櫨」拝受、拝読、「眼福」を得ました。活字離れが天津波の如く押し寄せる今、堂々の三十三号に最敬礼です。  
いずれの同人も「人生史」を誇りとともに筆にさしている姿、まさに羨望の極みです。重富氏の「霞ヶ関人生興味津々。それにしても「昔々」のことを日時、場所、人物まで克明に記憶、さすが「キャリアー」は、

と感心しました。『初めての救急車』、書き出しが秀逸。『ワープロ』は同感。『八女の竹紙』の文化を十八回もの「長編」に畏敬すべき文化史です。  
『黄櫨』のバックナンバー、HPでも可はよい。同人誌でデジタルと共存は稀有なのでは。  
「本」の品格は編集後記で決まると愚考。貴殿の「筆」再読。文の師に改めて敬意を表しました。『黄櫨』の益々の隆盛をお祈りします。  
よい 丑年をお迎え下さい。  
不 一

## 編集掌記

▼『ya』の使命の一つは、『自分史図書館』へ寄贈して戴いた著者への礼状であると考えながら編集している。本を差しあげても、なにも反応がないというのは寂しい。発信—受信—そして発信、この連携によって豊かな人間関係が生じてくる。

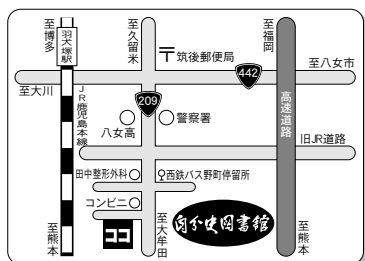
▼「人生史サークル」会誌『黄櫨』も編集し、十冊ほど余分にわけてもらい、マスコミ関係にも届けているが、この種の冊誌紹介の欄を設けられている新聞はないようだ。ただ個人的にいいいな感想を届けて貰うだけでも嬉しく有難い。そんな思いで、懇切に批評感想を寄せていただいた富沢さん、秋山さんよりの私信だが、ここに紹介するこ

とにした。おふたりさま、無断掲載、お許し下さい。

▼『ya』48号、標題も「牛」年にちなみ、タイトルもそれと一目で判るようになった。牛の歩みについては一步一步の足どりにある。一号一号に心をこめて編集したいと思いを新たにします。  
(自分史図書館長 椎念猛)

## 自分史図書館

入館無料  
開館 午前9時～午後5時  
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。  
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122  
西鉄バス野町停留所より徒歩5分  
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan